

# 南極OB会 会報

No. 39

発行 南極 OB 会  
会長 国分 征  
編集 広報委員会

## 今号の主な内容

- 新年のご挨拶 ○昭和基地から新年のメッセージ
- 第 61 次観測隊の壮行会開催 ○第 61 次南極観測計画の概要
- 第 61 次隊壮途記念講演「南極海洋観測の新しい展開に向けて」
  - 第 28 回「南極の歴史」講話会の概要
- 話題: ○南極 OB 会アマチュア無線クラブ ハムフェア 2019 に参加
  - 世界中から戦争をなくすには—南極方式とコスタリカ方式と
- 支部便り (信州支部、茨城支部) ○南極関連情報 ○隊次報告 (20、26、27、34 次)
  - 新刊紹介 改訂増補版「南極読本」
  - 会員の広場 ○広報委員会からのお知らせ



## 2020 年 新年のご挨拶

南極 OB 会会長 国分 征

新年明けましておめでとうございます  
皆さま令和最初の正月をそれぞれの場所で  
迎えたことと思います。

南極 OB 会会報の創刊号発行は 2007 年 10 月、今号で 39 号を数え、今年で 13 年目を迎えることになります。創刊号で川口前会長が先を見通して挨拶された中で、①会報の発行、ホームページの続行、②「南極教室」の続行、③ 50 周年記念事業の残務整理、④これまでずっと続けてきた出発隊の壮行会とミッドウインター祭の継続の 4 点を挙げています。これらの目標は皆さんの協力を得て着実に実施してきました。このうち「南極教室」については、応募数が減少傾向にあり、何らかの対策が必要です。また、川口前会長は、これらの事を進めていく上で基本になるのは名簿の整理が大切であると指摘し、50 周年記念事業でかなり整備されたが、今後とも続けていく必要があり、引き続きの協力をと述べていました。

観測隊が 61 次を数えるにあたって、今年は、第 1 次隊から 61 次隊までの隊員の現状についてまとめた名簿を作成しました。前回の名簿



(2008 年版) は、50 次までのまとめでしたので、第 61 次までの積み重ねの重みを感じています。

今後は、運営委員会のメンバーの若返りを図るなど、南極観測の発展に応じた南極 OB 会の充実・発展を会員の皆さんとともに推し進めていきたいと思います。なお、一般社団法人南極 OB 会については、カレンダー作成などの収益事業について体制を整えていることを報告し、新年の挨拶といたします。

## ＜昭和基地から新年のメッセージ＞

### 南極 OB 会の皆さま

新年、明けましておめでとうございます。南極昭和基地より新年のご挨拶を申し上げます。皆様におかれましては輝かしい新年をお迎えのこととお喜び申し上げます。

一昨年の末に昭和基地に到着して以降、夏隊および 59 次越冬隊と協力して夏作業をこなした後は、60 次越冬隊員 31 人で昭和基地の維持にあたって参りました。6 月にはブリザードが 8 回到来し、また 10 月は記録的に暖かく 12 月半ばまで晴天が続いて海水状態の悪化を心配するなど、お天気面での話題に

事欠かない 1 年でした。昨年末には 61 次隊を迎えて、慌ただしさを増しています。やはり例年通り、越冬隊にとっての実質的な正月は、2 月初めの越冬交代を経て、しらせに戻ってからとなりそうです。

本年も皆様が御健勝で御多幸でありますよう、心からお祈り申し上げます。



2020 年 1 月元旦  
第 60 次南極地域観測隊  
越冬隊長 堤 雅基



2019 年 12 月の昭和基地主要部

## 第 61 次南極地域観測隊壮行会開催

南極 OB 会主催の第 61 次南極観測隊の壮行会が、2019 年 11 月 1 日（木）、午後 6 時半より、レストラン「アラスカ」パレスサイド店で開催された。第 61 次隊員 24 名を含め、総勢 58 名の参加があった。最初に国分 征会長より、恒例の壮行会では参加いただいた大ベテランの先生方に感謝するとともに、観測隊には日本の観測隊から新しい研究手法を開発された南極 OB の内藤さんより斬新なバ

イオロギング研究のお話を聞いていただき、大いにチャレンジしていただきたいと挨拶があった。

最初に、内藤靖彦氏による壮途記念講演があった。内藤氏は現在、国立極地研究所名誉教授。専門は海洋動物生態学である。南極には第 21 次、25 次副隊長兼夏隊長、27 次越冬隊長、31 次では観測隊長兼越冬隊長を経験された。

記念講演は題して「南極海洋観測の新しい展開に向けて」であった。1986年、第27次隊の越冬中、昭和基地近くで水圧を測る深度記録計によってアデリーペンギンの潜水行動が最初に調べられた。それ以来、内藤氏は海洋生物のバイオロギング研究のパイオニアとして世界で活躍されている（本誌、別項を参照）。

続いて、第61次隊の観測隊長兼夏隊長青木 茂氏（北海道大学）より、観測計画の概要説明があった。第61次観測隊は夏隊42名、越冬隊29名、同行者21名（うち1名は越冬）の合計92名で編成される。越冬隊長は青山 雄一氏（国立極地研究所）が務められる（本誌、別項を参照）。

壮行会の懇親会は同会場で午後7時半より、阿保敏広氏（35、45次越冬）の司会進行の下で開催された。最初に南極OB会国分会長（7次）の挨拶に続いて、芳野赳夫氏（3次）から南極の自然と生活を存分に楽しんでいただきたいと挨拶があった。竹内貞男氏（10次）は無事の帰国を祈念して、乾杯の音頭を取られた。しばらく歓談の後、第61次南極観測協力を担う自衛艦「しらせ」の鵜川副長より祝

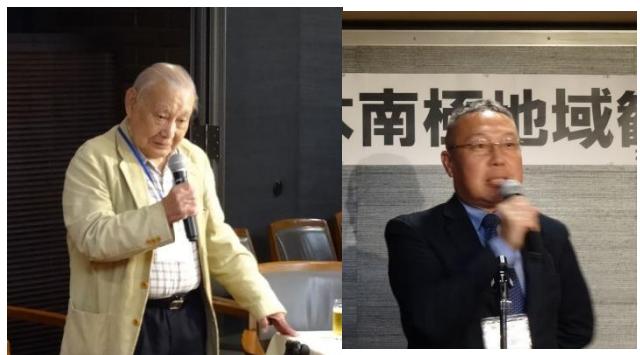
次）の挨拶に続いて、芳野赳夫氏（3次）から南極の自然と生活を存分に楽しんでいただきたいと挨拶があった。竹内貞男氏（10次）は無事の帰国を祈念して、乾杯の音頭を取られた。しばらく歓談の後、第61次南極観測協力を担う自衛艦「しらせ」の鵜川副長より祝

## 第61次南極観測計画の概要

本日は第61次隊の観測テーマとその概要を紹介したい。観測項目は第IX次六か年計画の下で、重点観測3件、一般観測13件、萌芽観測1件である。トピックスとしては重点研究サブテーマの「氷床・海水縁辺の総合観測」の中で、「しらせ」往復の航路で、氷床の流出加速への海洋の影響が考えられるトッテン氷河近傍で観測を行う。また、過去の氷床変動史を反映している地質学的データの取得、湖沼・浅海に存在する湖成、海成堆積物の取得を計画している。さらにセールロンダーネ山地でベルギーの協力の元で地質学、陸上生物の調査を行う。

越冬観測ではパンジーレーダによる南極上空大気の精密観測から探る全球大気システムのほか、萌芽研究の一環として、JARE初の社会科学的研究観測の計画としてリクス対応の実践知の把握に基づくフィールド安全教育プログラムの開発などがある。一方、設営分野では基本観測棟の放球デッキ放球棟の建設、ドームふじ基地への燃料輸送、南極移動基地ユニットの実証実験などが計画されている。第61次隊の行動は4つに区分され、観測船「しらせ」による海洋観測を中心とした観測、プリンス・エリザベス基地でのセールロンダーネ隊の観測、ドームふじ基地でのドーム隊の観測、そして海鷹丸による観測である。

新しい価値の観測・研究を求め、継続観測の意義を不斷に確かに、「ワンチーム」コミュニケーションと相互理解を大切に、安全第一に、モットーに、観測を行っていくのでよろしくお願いしたい。



芳野赳夫氏

鵜川副長

辞があった他、南極OB会支部、オーロラ会等から激励の挨拶があった。歓談を挟んで、青木 茂観測隊長による出発にむけた挨拶と夏隊員の紹介、青山雄一越冬隊長による越冬隊員の紹介があった。続いて、堤 雅基第60次越冬隊長から第61隊へ向けてのメッセージが披露された。国分会長より第61次観測隊に対して、南極OB会が作成した南極カレンダー2020年版の贈呈があった。全員による記念撮影を終えたあと、和やかにうちに閉会となった。

（神田啓史）

## 青木 茂（第61次南極観測隊長）



観測計画を紹介する青木観測隊長



南極OB会主催第61次隊壮行会参加者の皆さん

## 第61次隊壮途記念講演

### 「南極海洋観測の新しい展開に向けて」 内藤靖彦（21次冬, 25次夏, 27次冬, 31次冬）

本日は私が何を思って研究してきたのかをお話ししたい。研究の目的は南極海洋の中深層生態系を解明することであったが、その研究の手段として、バイオロギングの開発があった。1960年代の後半、東大海洋研での研究テーマはオホーツク海のアザラシの生態であったが、捕獲した動物の解剖でデータ取るだけで、海の中の生態はほとんど解らなかった。そんな時代に考えたことである。

#### 研究の発想

1969年にアポロ11号が打ち上げられた。それは、あらゆる機器を開発し、それを駆使した末の成功であった。宇宙開発が脚光を浴びる反面、海洋動物の世界は何をやっているのだろうという気持ちが当時強くあった。海洋動物は餌を求め、回遊し、繁殖して生存を達成している。この動物の行動をどのようにしたら分かるのかが私の課題であった。そこで考えたのが、動物自身をセンサーとして記録計を取り付けて、動物自身にデータを取つてもらう方法である。問題は装置の大きさである。最初ウミガメに取り付けた装置は大きな記録計であったが、動物はしっかりと記録計を背負って戻ってくれたことは驚きであった。この時から、いかに超小型の記録計を開発するかが私の課題になった。試行錯誤する内、新聞紙上で、シリコンウェハーにダ



講演する内藤靖彦氏

イヤモンド針で超細密線を描く技術があることを知り、これを参考に世界に例のない超小型記録計の開発を行った。

#### バイオロギングとは

動物が何分潜っているのかの生理学よりも、どの深さで何を食べているかの生態学に興味があり、そのためには超小型の長期記録計が必要であった。最初に開発した機器は線幅7ミクロン、紙送り速度0.024mm/毎分、記録時間が150日の記録計であった。面白いことに、これを一番評価してくれたのは超高層や地震学の研究者であり、生物の研究者ではなかったことである。最初の実験はカルフォルニアのキタゾウアザラシである。回収された

記録計から平均潜水時間 20 分、平均水深 500m (最大 1200m) の潜水を昼夜の区別なく 80 日間続けることが解った。疑問は「いつ?どこで?何を?どれだけ?そして何故このような深さで?」、さらに「効率を支えているものは?中深層とは?」が大きな研究課題となっていました。



キタゾウアザラシにアナログ式記録計を装着したところ

### デジタル革命

Digital revolution は 1980 年代中頃からであった。その頃、いち早くデータのデジタル化を進めていたのは極地研究所では超高層や地震の分野であった。デジタル化は喫緊の課題であったが、小型化の点で課題があった。さらに最新の高い技術は大企業を中心に存在するが、我々の仕事に継続的に関わってくれるメーカーはない。それならばと、大企業から脱サラしてくれる人材を見つけるのに奔走した。デジタル化が可能になると単に深度ばかりではなく、多様なセンサーを同時に収録し、解析ができるようになる。とくに加速度センサーは動きが判る点で興味深い。アザラシの頸に取り付けた加速度計の解析によって動物の水中での採餌が手にとる様に分かって来たのは、動物の水中での生態を知る上で大きな成果であった。研究の発展に伴い、2003 年には極地研究所が主催する「国際バイオロギングシンポジウム」を開催し、海外から 100 名を含む 200 人が参加した。このシンポジウムにより「バイオロギング」が海外の研究者にも認知されることとなつた。その後もこのシ

ンポジウムは世界各地で継続して開催されている。現在は 10 回を数え、1000 人が集まる大きな研究領域に発展している。

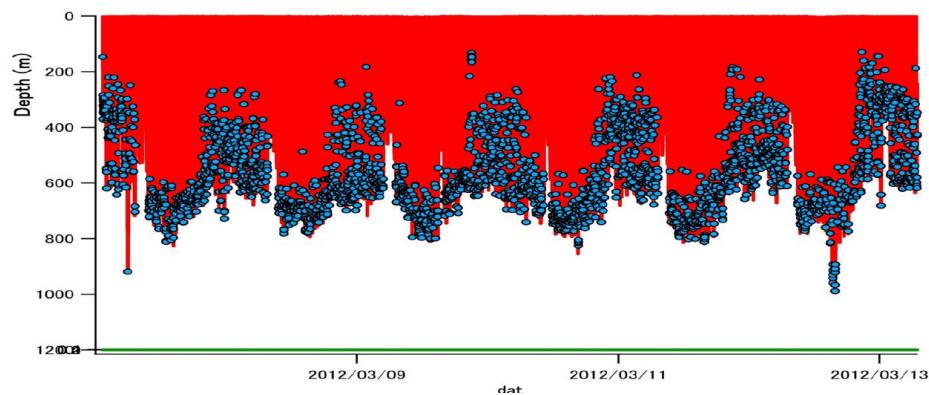
### 南極海の二つの生態系

環境変動が叫ばれ、西南極のアデリーペンギンの数が減ったという話がある。アデリーペンギンはナンキョクオキアミを主要な餌としている。しかし、ナンキョクオキアミは温暖化による海氷域の後退と関係して減少していると言われている。南極海には温暖化の影響を受け易いオキアミを中心とした水深 200m ほどの表層生態系がある。一方では 200m を超えた深度に生息するハダカイワシや頭足類それを捕食するハクジラ やアザラシなどを中心とする謎の「中深層生態系」が存在することは余り知られていない。

謎の生態系と言われる南極の中深層の生態系については、鯨類研究所の笠松先生が「ミナミトックリアザラシは 50 万頭が生息している」と論文でいわれたことが私の興味の始まりであり、ゾウアザラシの深い潜水行動を知った私にとっては南極海にも「巨大中深層生態系が存在する」を信じて研究する端緒になつた。

### 中深層はどんなところ

中深層 (水深 200-1000m の世界) は暗く、低温で、植物の生産もなく、時に低酸素の環境である。このような環境には巨大なクジラやアザラシの餌が大量にいるとは思われない。特に海生哺乳類は高い体温を維持するため大量の餌を必要としている。数 10 万頭ものアザラシが生息するだけでも膨大な餌のストック (漁業なら巨大漁場に匹敵) が必要である。頸加速度計からゾウアザラシは 10-20cm の小さな餌を食べているらしいこと、さらにア



キタゾウアザラシの潜水記録 (赤線) と採餌イベント (青点)



深海イカを食べるキタゾウアザラシのビデオ記録  
から

ザラシに取り付けたスマートビデオ（顎加速度信号から数分間だけ作動する（餌は群でい

るから））から餌はハダカイワシを中心としたマイクロネクトンが80%、その他はイカ類が20%であることが判った。イカ類が多いのはハクジラの採餌習性とも一致する。中心層、約400m以深ではマイクロネクトンとイカ類、そして深い潜水が可能な大型海生哺乳類の世界であるらしいことが分かりつつある。ライバルとしてはサメなどの魚もいるが、低温層では、代謝が非常に低いので、哺乳類のライバルにはならないと考えられる。知られていない世界が次第に明らかになりつつある。

これから南極に向かう観測隊の皆さん、南極は科学のフロンティアであります。新しいフロンティアをどんどん開発して、新しい科学にチャレンジングしていただきたい。

## 第28回「南極の歴史」講話会の概要

(2019年3月9日(土) 14:00~16:00 日本大学理工学部1号館133教室)

第28回「南極の歴史」講話会は演題I「みずほ基地での越冬」、講師 高橋修平(23次冬)、演題II「「宗谷時代」から「ふじ」の時代へ」、講師 古田逸子(元文部省極地課)、長谷川慶子(元極地研図書司書)の2テーマ、3講師で開催された。これまで演題Iおよび演題IIの長谷川氏の講演について紹介したが、今号は演題IIの古田氏の講演概要を紹介する。

### 「宗谷時代」から「ふじ」の時代へ

古田逸子(元文部省極地課)

私が、南極に関わったのは、昭和36(1961)年の4月から39(1964)年の3月にかけての3年間です。「南極資料」の編集をするという事で南極観測に関わらせていただきました。4月に東大理学部の2号館にありました吉川先生の研究室が仕事場となりまして、身分は文部省の学術課の南極地域観測統合推進本部、通称南極本部の職員としてでした。

吉川先生の研究室におりました頃には、永田研にいらした国分さんの論文なんかを原稿として頂戴し、東大構内を横切って、2~3回往復したことがあります。9月に6次隊が基地を閉鎖することになって、出発して行きました。すでに昭和35年の9月に6次隊で打ち切りが閣議決定されていて、南極観測はこれで終わりという事は知っていましたが、論文の出版事業は継続するという事であまり心配せずに就職しました。吉川先生は、南極資



講演する古田逸子氏

料には写真を載せて頂きました(南極資料、17)が、最後に扉に釘を打ち付けて帰ってこられました。すでに37年の2月に再開は閣議決定されましたが、いつ再開されるか怪しいと思っていました。

吉川先生がお出かけになったので、吉川研究室で私は一人になり、12月頃に本部から戻ってくるようにと言われ、その頃本部に移りました。37年の4月に科学博物館の新館2階地震課の横に極地課ができ南極関係の図書などと一緒に、そこに移りました。地震課の課長として1次夏隊と3次で越冬された村内必典先生が居られ、極地課長と併任されていました。程なく先年亡くなられた佐野雅史さんが着任しました。

まだ新館にいた夏頃だったと思いますが村山さんがぶらっと極地課を訪問されました。私はてっきり村内さんを訪れたのかと思っていましたが、実は極地課の課長になることが多分夏ごろに内定していたと思います。夏頃新館の方から木造ブラックの団体休憩室の2階が多少広いので、極地課の部屋と言う事になり、村山さんが課長として着任されました。村山さんがおいでになると木造の階段なのでドンドンドンと音で上って来られるのでわかるのですが、ほとんどお留守でした。たぶん

再開に向けていろいろご活躍されていたのだ  
と思います。

一度 37 年 10 月頃だと思いますが中曾根さんと一緒に一緒に村山さんが、その時は一緒に静かに上がってこられて、課長の席などをご案内されていました。その後 11 月に長谷川峻さん、中曾根康弘さん、お二人とも衆議院議員でしたが、お連れになってマクマード基地をご案内しました。これが村山さんの南極にかける情熱の典型だと思いますが、一生懸命努力なさって国会議員のお力をも借りて再開に漕ぎつけたのだと思います。38 年になり 3 月に松田さんが着任されました。最初の頃の松田さんの印象的な思い出は、「かいわれ菜」と「もやし」を一生懸命窓際で育てているお姿でした。8 月には川口さんが着任されて、最初のうち佐野さんと筆者だけの二人だったのが、その頃からいろいろ準備活動が本格的に始まったと思います。

村山さんは暖かくて大きなお人柄でした。村山さんと御面識を得たのは私の生涯の幸せとするところです。

1960	1961	1962	1963	1964	1965	1966	1967	1968	1969
35	36	37	38	39	40	41	42	43	44
宗谷	宗谷			ふじ	ふじ	ふじ	ふじ	ふじ	ふじ
5次隊	6次隊	残務整理	再開（閣議決定）	自衛隊法改正	7次隊	8次隊	9次隊	10次隊	11次隊
村山雅美	吉川虎雄			村山雅美	鳥居鉄也	村山雅美	楠 宏	松田達郎	
		科博極地学課		科博極地研究部					
							1970.8 極地研究センター		
							1973.9 極地研究所		

## 「宗谷」から「ふじ」の時代の組織や隊の変遷概要（渡辺興亞氏作成）

## 話題

＜南極OB会アマチュア無線クラブ ハムフェア 2019に参加＞  
小林正幸（25次冬、46次冬）

昨年・一昨年に引き続き、日本で最大のアマチュア無線関連のイベント「アマチュア無線フェスティバル ハムフェア 2019」に参加、クラブブース（お店）を構え、アマチュア無線を通して南極観測を広くアピールすると共に、南極OB会で企画・商品化した記念品や南極関連書籍等の販売をしました。

2019年8月31日(土)・9月1日(日)の

2日間、東京ビッグサイト南3・4ホールで「世界がともだち！アマチュア無線！！」のキヤッチフレーズのもとに全国各地から延べ約42,000名のアマチュア無線愛好者で賑わいました。ブースには、極地研から借用した写真パネルや装備、南極の石や氷を展示し、来場者の興味を誘いました。特に南極の氷は毎年人気があり、写真に撮る人も多くみられ

ました。

元南極観測隊員や現役の南極観測隊員と直接話す機会は珍しく多くの質問や物品の購入でブースは終始賑わいました。

また、毎年この機会を楽しみにしている南極観測隊OBや関係者の来訪もあり、久しぶりの再会で話が弾む等、南極サロン的な役割も果たすことができました。

#### (参考)

日本アマチュア無線連盟 (JARL) のホームページにも関連記事があります。

[https://www.jarl.org/Japanese/1\\_Tanoshi\\_mo/1-3\\_Ham-Fair/Ham-Fair.htm](https://www.jarl.org/Japanese/1_Tanoshi_mo/1-3_Ham-Fair/Ham-Fair.htm)

※ 南極 OB 会アマチュア無線クラブでは、常時クラブ員を募集しています。

アマチュア無線を通しての南極観測のアウトドア活動に興味のある方のご連絡をお待

ちしております(連絡先:南極OB会事務局)。



クラブブースで南極観測の説明や南極グッズを販売する参加者の皆さん

## 世界中から戦争をなくすには——南極方式とコスタリカ方式と 柴田鉄治 (7次夏、47次夏)

「世界中から戦争をなくすには、どうしたらよいか」は、私の終生を通じての「私への問いかけ」である。子どものころの戦争体験から、科学者になりたいという夢まで捨ててジャーナリストへの道に転身したのも、その一つだった。

「ジャーナリズムの使命は、権力の監視にある」といわれる。その中でも最も大事なことは、戦争を起こさせないことだ。権力者の中には、戦争をしたがる人がいるからだ。

ジャーナリズムの使命は、平和を守ることだといつても過言ではないが、平和には二種類ある。争いを武力で解決しようとはしない、軍備を捨てる「真の平和」と、軍事力(抑止力ともいわれる)のバランスで保たれる「仮の平和」である。

戦後の日本は、戦争を放棄した憲法9条のもと、武力を持たない「真の平和」を目指してスタートしたが、米ソ対立の激化で、その後は自衛隊を持ち、日米安保条約のもとで米国の「核の傘」による「仮の平和」の中にいる。

それでいいのだろうか。軍事力のバランスで保つ「仮の平和」というのは、どうしても「抑止力の強化」と称して軍拡競争に走り出す危険が伴う。北朝鮮が国民の飢えを放置して核兵器やミサイルの開発に全力をあげてい



コスタリカの位置 (コスタリカ共和国政府観光局日本事務所 HP (<http://www.costarica.co.jp/>))

るのも、「抑止力」のためだと主張しており、それに対抗して、韓国も日本も「核兵器を」と言い出したら、世界はどうなるのか。

したがって世界中から戦争をなくすには、「仮の平和」ではなく「真の平和」を目指さねばならないことは言うまでもなかろう。

いま、この地球上に「仮の平和」ではなく、「真の平和」を実現しているところが二つある。南極大陸と中米の小国、コスタリカである。

南極は 1961 年に発効した南極条約によって「国境もなければ軍事基地もない」平和の地になっている。世界中が一つの国家になって軍隊がなくなれば、戦争もなくなる。

もう一つの中米の小国コスタリカは、日本よりやや遅れて 1949 年、憲法で軍備を捨てた。日本とは違って、その後ずっと非武装を守り通しているのだからすごい。しかも、軍事費はすべて教育費に回して、軍事費はゼロなのだ。

コスタリカはそれまで平和国家だったわけではなく、内戦も絶えなかった国だが、憲法ができたからは、紛争はすべて国際機関に訴

えて解決するという方式を堅持している。

「世界中を南極にして、各国が県か州のようになる」南極方式がいいのか、それとも「各国がそれぞれ軍備を捨てる」コスタリカ方式のほうがいいのか。どちらも簡単なことではないが、どちらでもいい。核戦争が起これば、地球も人類も滅亡するのだから。(以上)

## 連載 支部便り

### 支部便り④(信州支部)

#### 信州支部南極飲み会を開催

10月27日(日) 第61次隊に信州支部から参加する赤田さん・小久保さんを含めて「南極飲み会」を開きました。壮行会でなく「南極飲み会」になった理由は、お二人の希望で「気軽な飲み会を」から命名されました。そして、会場もお二人のお宅に近い大糸線安曇追分駅前の八千代食堂になりました。案内のメールに駅名を「信濃追分」としてしまい間違いを指摘されましたが、次の松川駅からは大町駅までは全て「信濃」がつきます。信濃追分駅は軽井沢にあり、どうやらそちらの方が有名のようです。

会は年長の川久保さんの音頭で乾杯から始まりました。実は川久保さんは初参加だったので、それぞれの自己紹介をして南極観測隊への思いを語りました。ここ10数年信州支部からの参加は野外観測支援が中心になっています。ここ数十年の観測の経過や 59 次越冬隊の様子などが話されました。そして今後支部行事は温泉で泊り、県内各地での忘年会、



写真前列中央（7人の真ん中）は 61 次越冬：野外観測支援の小久保さん、その左（青）が夏隊：野外観測支援の赤田さんです。ちなみにその左が筆者です。

キノコ狩り等、多様な支部活動案が提案されました。最後に丸山さんが持参した「日本南極地域観測隊」の横断幕を持って記念写真を撮りました。

(幹事長 萩無里)

### 支部便り④(茨城支部)

#### 小型雪上車 SM-254 の塗装作業、つくばエキスポセンターでの講演・中継と交流キャンプ

##### 小型雪上車 SM-254 の塗装作業

つくばエキスポセンターには、南極から2011年に持ち帰った小型雪上車 SM-254 が動態保存・展示されている。この SM-254 は、南極 OB 会茨城支部の有志メンバーにより、塗装や修理などの補修作業が適宜行われてい

るが、屋外の雨ざらしの場所での保存となっているため、塗装が痛んでくる。2013~14年にかけて OB 会有志によって行ったボディー全塗装から 5 年が経過し、大分色あせが目立

ってきたので、2019年のエキスポセンターでの南極イベント（ミーツ・ザ・サイエンス「南極の今！～つくばに戻った隊員たち語るから」（2019年9月29日開催））を前に、日本へ帰ってきてから2回目となる全塗装作業を行うこととした。

前回の作業を中心的に行ってくれた産総研の石塚さんから当時の作業手順を聞き、塗装をはがすグラインダーやペンキなどを準備した。また、当時の作業を気象庁OBの松原さんがビデオにまとめてYouTubeにアップしてくれていた映像を見て、イメージトレーニングした。1日目の作業には、日立から駆けつけてくれたOBを含めのべ8名が参加し、猛暑の中朝10時から夕方6時まで作業を行った。南極OB特有の臨機応変な作業のおかげで予想以上に作業がはかどり、一気に本体の塗装まで完了した。その後、9月22日に254とJAREの文字入れやクリアペイントの上塗りなどの作業を次回行い補修作業が完了した。



オレンジ色の塗装が完了したSM-254と当日の作業メンバー。254とJAREの白文字はまだ入っていない

### つくばエキスポセンターでの講演

9月29日当日には試乗会を開催した。整理券制で1回につき10人、計4回の試乗体験を行ったがどの回もすぐに整理券がなくなり来場者の興味の高さをうかがわせた。ドライバーはOB会メンバーが交代で務め、発進のホーンや誘導者の旋回指示なども忠実に行い、現役時代を彷彿させるSM254の動きに来場者だけでなく、手伝いに参加したOBの多くも見入っていた。同日のメインイベントであるOBの講演と南極中継会場にも多くの方にお集まりいただいた。帰国したばかりの59次越冬隊員の津田さん（気象庁）には南極までの道のりや昭和基地での仕事、生活についてお話しいただき、60次夏先遣隊としてドームふじ基地に行ってきた津滝さん（東大（現在



SM254試乗会の様子

は極地））にはOBでもあまり知らないドームふじ基地の現状やアイスコア掘削の意義などについて、難しい内容ながら子どもにもわかりやすい説明をしていただいた。さらに、ゲストとして61次隊の青山越冬隊長をお招きして、61次隊の行動や青山越冬隊長が訪れたことのある外国基地についての話題をご提供いただいた。イベントではタブレット端末を使用した簡易版南極中継も行い、60次で越冬中の藤田さん、横瀬さん（ともに気象庁）、松嶋さん（関電工）の3名に管理棟内の「散歩体験」をしてもらったり、会場からの質問に現地隊員に答えてもらったりした。



講演会の様子

イベント最後には、茨城県にゆかりのある61次隊員5名の紹介をし、各自から出発に向けた意気込みを語ってもらったほか、来場者にはお土産として南極氷の欠片をプレゼントし、太古の空気がはじけだす音に耳を傾けてもらった。当日は20名を超えるOBに参加してもらい、イベントの手伝いをしてもらったおかげもあり、イベントを成功裏に終えることができた。

### 茨城支部交流キャンプ

エキスポセンターでのイベントから遡ること2週間、9月14日～15日には茨城県東茨城郡城里町の「道の駅かつら」併設キャンプ

場において茨城支部 OB 会交流キャンプを実施し、OB の家族含め 17 名が参加した。14 日 14 時にキャンプ場に集合し、大人たちはバーベキューの準備を早速始めたが、ここでも各自が南極 OB らしくテキパキと動き、あつという間に火おこしまで終わらせて、日立 OB の馬場廣明さん（24、28 次）がこの日のために釣ってきたという天然鮎を囲みながらビール片手に談笑が始まった。多賀さん（8、12、21 次）と日立 OB の滝川さん（16、27 次）には前もって色々な遊びを用意しておらず、キャンプに参加した OB の子どもたちはハンモックやお手製ブランコ、那珂川での水遊びを楽しんだ。

キャンプ 2 日目には、今回の交流会のメインであるカヌーで川下りを楽しんだ。9 月 15 日は朝から好天に恵まれ、川遊びには最高のシチュエーションであった。20km ほど上流の出発地点に移動してカヌーを組み立ててから始め、3 艇に分かれて順番に川下り体験を楽しんだ。当初は、子どもたちに川下りはまだ早いかと思い出発地点で少し乗ってみるだけの予定だったが、本人たちの強い希望もあり大人と一緒に乗り合わせて川下りを楽しんでもらった。アウトドアを楽しむ機会



カヌーの組み立て

が少ない中、興味を持ったものに臆せず飛び込む姿はさすが南極 OB の子どもといったところであろうか、将来が楽しみである。

2019 年の交流キャンプは天気に恵まれ、事故もなく大いに楽しみ、年代や業種を超えて交流を深めることができた。茨城支部では毎年交流キャンプを開催しており 2020 年も茨城県内での企画を考えている。現在南極にいる隊員にも帰国後はぜひ交流会に参加してもらいたい、南極 OB の輪を広げていければ喜ばしいと思っている。

（茨城支部 中島英彰（31 次冬、48 次冬）、森陽樹（58 冬））

## 南極関連情報

### 第 62 次南極地域観測隊長・副隊長決まる

2019 年 11 月 6 日（水）に開催された第 155 回南極地域観測統合推進本部総会において第 61 次南極地域観測隊隊長兼夏隊長として橋田元氏（39 次冬、43 次夏、44 次冬、52 次夏、53 次夏、54 次副隊長兼越冬隊長）、副隊長兼越冬隊長として阿保敏広氏（35 次冬、45 次冬）、副隊長兼夏副隊長：夏期オペレーション担当として金子宗一郎氏（49 次冬、56 次夏、60 次夏）を決定した。

### 文部科学省主催 第 61 次南極観測隊壮行会

2019 年 11 月 6 日、明治記念館において南極地域観測統合推進本部主催の壮行会が挙行され、青木茂観測隊長兼夏隊長、青山雄一副隊長兼越冬隊長以下、越冬隊 29 名、夏隊 42 名の計 71 名の観測隊員と、21 名の同行者（外国人研究者、大学院学生、高等学校教員、観測支援技術者、ヘリコプタークルー、報道関係者等）の合計 92 名で編成する。竹内周

作しらせ艦長以下約 180 名の乗組員および隊員および乗組員家族、並びに関係者多数が出席した。

壮行会では観測隊隊長、しらせ艦長から出発に当たっての決意が述べられた。また上野文部科学副大臣、河野防衛大臣から壮行の挨拶があり、来賓の国会議員等から激励の挨拶があった。

「しらせ」は 11 月 12 日に晴海ふ頭を出港、観測隊は 27 日に成田から出国し、豪州フリマントルで合流し、南極昭和基地に向う。

### 昭和基地に第一便

2019 年 12 月 30 日 8 時 5 分（昭和基地時間）（日本時間 14 時 5 分）、昭和基地の約 19 キロ地点に停泊中の「しらせ」より飛び立ったヘリコプターは、8 時 22 分（昭和基地時間、日本時間 14 時 22 分）に昭和基地に到着した。61 次隊の青木茂隊長、しらせの竹内周作艦長を先頭に、61 次の隊員らがヘリから降りると、

昨年 12 月から昭和基地で観測を続けてきた 60 次越冬隊のみなさんが笑顔で出迎えた。

60 次越冬隊の堤雅基越冬隊長は「昭和基地へようこそ」と歓迎し、青木隊長は「お迎えにあがりました」と話した。

### 「しらせ」の昭和基地接岸

「しらせ」が、2020 年 1 月 5 日（日）現地

## 連載「帰国後の各隊の動き」（隊次順に掲載）

### ～『20 次の会』

今年は 20 次隊が越冬してから 40 年が経過し、節目の集いになった。

開催直前の台風 19 号の影響で、1 名参加できなかつたが、米寿を過ぎた吉田隊長や山崎越冬隊長をはじめ、北は北海道、南は広島から最終的には 20 名が参加。因みに今回出席者の平均年齢は 73.5 歳。まずは昨年開催以降に亡くなられたお二人に黙祷を捧げた後に宴会が始まった。

喉も潤い、各位 3 分程度の近況報告をお願いしたが、話し始めると熱が入り、時間内に終わる人は殆どなく、例えば、＊この会に出席することが生き甲斐になっている。＊広島の平和公園や広島城でボランティアガイドをしながら楽しんでいる。＊ボランティア活動として小学校の理科の実験で先生をサポートしながら生徒達から元気をもらっている。＊この 1 年で山登りした山の標高を累積すると

時間 14 時 50 分（日本時間 20 時 50 分）、昭和基地の沖合約 400m の定着氷に到着し、昭和基地接岸を果たした。

今シーズンは、往路ラミング回数は 168 回であった。

（「第一便」、「接岸」の両記事は、国立極地研究所ホームページを元にまとめた）

### つくばで開催～

約 8,000m。来年もこれ位登れれば（元気であれば）いいなあ。＊現在も働いており、税金を〇千円納めている。これに関連

し、アルコールも進んでいる中、今回の消費税アップへの意見や税制改善の高度な話も飛び交い、話は尽きなかった。また、越冬隊長からは現在入院している隊員の十八番も出て盛上った。

宴会の後、一つの部屋に集まり、南極 14 回渡航の吉田隊長から南極の思い出話を拝聴することができた。例えば、＊2 次観測でビセットされた宗谷と救援に来た米国バートン・アイランド号の思い出。＊4 次観測では、100



集合写真：筑波山をバックにホテル前に



NHK 生中継(吉田隊長のプレゼン写真): 南極からのテレビ  
生中継用パラボ  
ラアンテナ

沖からの雪上車輸送や世界で初めて白瀬氷河流速測定(年間 2 キロの流速を観測)。\* ドライバー調査で第 2 次スコット隊(1910/12 年)の C.S ライトさんとの出会い(1965 年 1 月、マクマード基地)。\* 20 次観測では、世界初の南極からのテレビ生中継等々。今回の“40 周年記念”に相応しい講演となつた。

その後(三次会)では、同行した報道関係者も今回 3 名出席されており、「世界初の南極からのテレビ生中継」の話題で盛上つた。

二日目は、筑波山(877m)にロープウェイで登つた。天気もよく、展望台から関東平野を一望できた。係員の方の話では、天気の良い日は富士山が見えるとのことだったが、当日は薄い雲で確認できなかつた。

その後、ホテルの送迎バスで下山し、つくばエキスポセンターに展示中の雪上車

(SM25S)の見学に向かつた。2011 年から展示され、その後、南極 OB 会茨城支部による整備を行ひながら、2017 年にはエンジンがかかるようになつた。一般公開では走行デモや試乗体験もできるように復元されていた。当日は走行できなかつたが、先月(9/29)の一般公開で幹事が撮影した走行デモのビデオを前日に見ており、それぞれの南極が蘇つたのではないだろうか。

しばし館内を見学した後、紅葉直前のけやき並木を徒步 5 分で昼食会場に向かい、料亭で季節料理を楽しみながら、“元気でまた会いましょう”を合言葉に「20 次の会・つくば」はお開きとなつた。

(上原 記)

## ～ 筑波山での第 26 次越冬隊のつどい ～

第 26 次越冬隊の 2019 年のつどいを 11 月 2~3 日(土、日)、筑波山神社近くの旅館にて開催いたしました。このつどいは 2011 年以来毎年続き、今回で 9 回目です。参加者は

12 名の元越冬隊員たち(福西隊長、上田、鮎川、川久保、神沢、島本、藤井、古館、堀川、前野、松村、山岸)。初日は宴会と温泉をゆっくり楽しみました。(後日、飲み放題メニューにしなかつた方が経済的であったかどうかが、26 次メーリングリストで話題になりました。越冬から 35 年も経つと、みんな飲めなくなりますね。筆者も同様。)

翌朝は筑波山散策(大半はケーブルカーを利用)。筑波山の紅葉を期待した企画ではあつたのですが、まだ少し早かつたようで、山頂でも紅葉はまだ一部だけの状態。午前中に筑波山を下山してつくばセンターまで戻り、つくばサイエンスツアーバスで JAXA と国土地理院の見学施設を訪問。つくばサイエンスツアーバスは 500 円で一日乗り放題なので、つくば観光にはお勧めです。筆者もつくば勤務であったのですが、灯台もと暗し、JAXA の見学施設訪問は初めてでした。ロケットも衛星も宇宙ステーションも実物大というのは迫力がありますね。昭和基地でとても小さなロケットを打ち上げたことを思い出しました。



26 次隊参加者の皆さん

JAXA から国土地理院への移動途中、エキスポセンターを通過します。丁度、越冬中につくば科学万博が開催されており、科学万博のコンパニオンのお嬢さんたちと昭和基地の独身隊員とが衛星電話を介してお話するという企画がありました(筆者は緊張してうまく話せなかつたような記憶が・・・)。エキスポセンター通過時にバスの車窓からオレンジ色の雪上車がちらりと見えます。大原鉄工所製作の SM25S 型。我々より後の隊次ではありますが、南極で実際に走っていたものです。なお、この雪上車は南極 OB 会茨城支部の方々により修復されて実際に走行できるようになっています。

最後の見学は、国土地理院の「地図と測量の科学館」。赤青眼鏡を使って立体視ができる

床一面の日本列島、地球の丸みと日本の広さを体感できる地球広場、測量や地図の歴史を勉強できる壁画図や伊能忠敬らの古地図等々、元国土地理院職員の筆者が一生懸命説明して

いたら、あっという間に最終バスの時間になりました。

(2019年のつどい 幹事 松村正一)

## ～ 27 次会 (2019) を開催 ～

2019年11月20日～21日にかけて27次会(2019)が、有馬温泉「兵衛向陽閣」で開かれました。今回は14名の参加で、33次の壮行会以来久々に九州から大家さんが参加しました。そして、今回は2010年の箱根から10年連続となる節目の27次会となりました。これは、出航・越冬・帰国の周年行事だけでなく毎年開催となつたためでした。また、有馬温泉開催は、今まで関東近郊開催が多かつたため、「関西開催」の要望を受けたものでした。

いつも通り東京駅18番線に新幹線組7人が発車30分前に集合しました。内藤隊長が新横浜から乗車して、早速のぞみでの車内宴会が始まりました。1年振りの再会にそれぞれに話が弾み、新神戸までの3時間弱はアツという間でした。谷上、有馬口と2回乗り換えて、1時間程で有馬温泉に到着し、宿に向かいました。既に宿には現地集合組が何人か到着していて、早速0次会となりました。風呂までの短時間ということでしたが、1回目のビールがすぐになくなり追加となりました。佐藤さんが到着して全員が揃いました。

18時からの1次会は、はじめにこの春亡くなった井上さんに黙とうをして始まりました。いつも通り秋田弁を多用する人から始まる

「一人一言」では、それぞれにここ1年の経過を報告しました。宴会場のステージには「27次会」の大きな看板、そして廊下にも部屋まで「27次会」の案内があり、宿の人から

「27次会とは」の質問もありました。全員集合の記念撮影をして、20時少し過ぎには1次会がお開きになりました。1323号室での2次会もいつも通り、30年前の昭和にタイムスリップして、それぞれのテーマで話しました。この時は各地の珍しい地酒等が並び、別な盛り上がりがありました。以前は時計の針が0時を過ぎて、誰かが声をかけるまで話が途切れることはませんでしたが、ここ数年は



27次会 2019 全員集合

その日のうちにお開きになります。もう一度温泉に入る人、そのまま休む人、それぞれでしたが、久々の再会に沸いた1日でした。翌日は早朝から付近を散歩する人、朝風呂に行く人、それぞれ有馬温泉を満喫しました。8時に全員揃って朝食をとりました。その後、出発まで少し時間があったので、8階のそれらしい場所で抹茶とお菓子をいただきました。抹茶をいただいた後、別な飲み物を抹茶の容器でいただきましたが、何とも趣がありました。その後はせっかく有馬温泉まで来たのだからと近くにあった「雪國稻荷神社」まで行き、お参りしました。今まで27次会では、列車と温泉の旅を重ねてきましたが、実は日本三古湯は初めてでした。宿の歴史が700年ということで、古くからの写真がありましたが、有馬温泉全体の風景を含めて思い出深い旅になりました。

次回27次会については、「初代しらせで」の声がありました。既にいくつかの隊次で実施されているので、それを含めて計画することにします。今回はウィークデイ開催となつたため、現役組で参加できない人がいたのが残念でした。年1回は会って大いに語り、樂しむが定着したので、27次会2020を盛大に開催できるよう計画します。

(27次 荻無里)

(27次の皆さまスペースの都合で看板をトリミングしました。申し訳ない。)

## 「中国極地研究所 楊所長現る！」そして JARE34 来日歓迎

アジア極地科学フォーラム(AFoPS)に参加されるために、中国極地研究所楊惠根所長が来日しました。

楊さんは中国人研究者として第34次南極地域観測隊の一員として参加し、宇宙部門の研究に従事されました。

日本南極地域観測隊史上、外国人として初めて越冬隊員として参加した楊さんは、当初日本語は殆ど分かりませんでしたが、通信隊員の献身的な指導のもと一ヶ月後には「もうかりまっか？」「ぼちぼちでんなあ」をマスターし、わずか1年足らずで日本語の新聞、学術書を苦も無く読み解くまでに成長していました。

楊さんの来日に伴い、JARE34 では 10 月 30 日に歓迎パーティーを極地研究所が所在

する立川で開催し、佐藤夏雄越冬隊長を含む14名の隊員が集いました。

1992年11月に日本を出発した隊員も27年間、社会や俗世間の風雪に耐え、今やすっかり頭やおなか周りに貫禄が出ましたが、気持ちは白い大陸を目指した青年のままで。

冒頭、佐藤隊長の挨拶で「JARE34への楊さんの参加は、日中国交の大切な架け橋…」の言葉に今更ながら重要な任務をかみしめました。

ひとたび乾杯を行えばお銚子がみるみる横になり、夏宿や管理棟のバーで繰り広げたあの日と同じ、笑いの絶えない思い出話に立川の夜は更けていきました。

(浅香隆二)



JARE34 の人々、前列左 2 人目が佐藤隊長



楊所長

## 新刊紹介

### 改訂増補版「南極読本」 南極OB会編集委員会 編

(成山堂書店、2019年11月8日初版、定価3000円(税別))

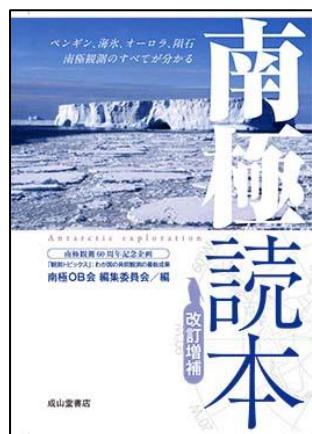
平成25年(2013)に初版、26年に重版が出された「南極読本」の改訂増補版が出版された。旧版の章立て解説頁を大幅に改訂するとともに、新たに記述された「観測トピックス」が組み入れられた、南極自然を解説した各章、コラムの記述、資料は旧版に読者から寄せられた要望、意見を参考に修正、補足が加えられている、また、最近の南極大気科学の中心課題となっている「大気エアロゾル」の章が新たに加えられている。

改訂増補版で特記すべきは旧版にあったQ/A形式の「南極セミナー」を削除し、「観測トピックス」に換えたことである。「南極読本」は基本的には南極自然の解説(章立て)で構成されており、幅広い読者層を想定し、南極観測における個々の研究成果の詳述

は避けている。

南極観測60周年記念企画として、わが国南極観測が研究分野毎の共同観測から成り立っていることに鑑み、主な共同観測・研究成果の紹介を目的に、当初は独立した出版物を企画したが、諸般の事情によりその実現が困難なため、本改訂増補版に組み入れられている。その結果、本書の書名は旧版を踏襲しているが、内容は新規の出版に近いものになっている。

(渡辺興亞)





訃報 ご遺族や会員の方からお知らせ頂きました。謹んでお悔やみ申し上げます。

お名前	隊次	部門	逝去月	享年	お名前	隊次	部門	逝去月	享年
松枝大治	23s	雪氷地学	'19.9.20	72	早川三次郎	10次,11次ふじ運用科		'19.2	不明
佐藤 保	25次,26次しらせ艦長		'19.8.19	85	下田泰義	29w,41w	設営一般	'19.10.31	68
佐伯栄治	1s	設営	'19.9	92	鈴木 康	1s,2s	設営	'19.5	90
竹内哲夫	会友	東大山の会	'19.9.12	88	宮原 巍	4s	装備	'19.11.24	85
佐藤博雄	24w	環境科学	'19.6.19	69	儀間 健	34w	航空	'19.11.26	68
松尾亮祐		宗谷 1,2,3,4	'19.10.1	95	金田榮祐	07w	超高層	'19.4	85
長沢 工	9s	地球物理	'19.10.28	87					

(敬称略)

## 第31回「南極の歴史」講話会のご案内

2020年3月28日（土）14:00～16:00（受付13:30）に、

演題I『南極に立った樺太アイヌー白瀬南極探検隊秘話』

講師 佐藤忠悦（南極探検隊長白瀬矗顕彰会 元副会長）、

演題II『南極海観測史～英国ディスカバリー号のパイオニアワークから現代・未来へ』

講師 永延幹男（元国際水産資源研究所 南大洋生物資源研究室 室長）

を開催予定です。今回は、東京都新宿区大久保三丁目にある「保善高等学校」で行います。詳しくは同封の案内で。

### \* \* \* 広報委員会からのお知らせ \* \* \*

#### ○通信費納入のお願い

今年度最後の会報を皆さんにお届けします。2019年度通信費をまだ納入していない方は同封の振込用紙で振り込みをお願いします。

#### ○編集の終わりに

南極OB会の運営委員として、南極OB会のwebページの作成管理、OB会の販売するグッズの製作等豊富なアイデアと実行力で活躍している、阿保敏広運営委員が第62次隊の副隊長兼越冬隊長として選出されました。喜ばしいことですが、運営委員会の活動が低下しないよう、努力したいと思います。皆様ご協力を。

年度の途中ですが、柴田広報委員長が退き、松原が担当することになりました。今まで、編集を担当していたのですが、編集に加え委員長の職務までもと、「トホホ」の状態です。慣れない委員長ですがよろしくお願いします。広報委員会を見回すと、今のところ現在員が不足しています。会員の方で、広報委員会に協力いただける方は以下の事務局までご連絡ください。

\*\*\*\*\*

南極OB会事務局 〒101-0065 東京都千代田区西神田2-3-2 牧ビル301

電話 : 03-5210-2252 FAX : 03-5275-1635

メール : [nankyoku-ob@mbp.nifty.com](mailto:nankyoku-ob@mbp.nifty.com)

郵便振込: 加入者名 南極OB会 00110-1-428672

南極OB会ホームページ : <http://www.jare.org/>

\*\*\*\*\*